



©Hikaru Hoshi

## 第181回定期演奏会

2021年3月6日（土）13:30開場 14:30開演

三井住友海上しらかわホール

指揮/角田鋼亮（当団常任指揮者）

- ・シュレーカー：室内交響曲
- ・モーツアルト：交響曲第41番 ハ長調「ジュピター」K.551

当初の予定より曲目が変更になりました。それに伴いソリストとしてご出演予定でしたソプラノ/鶴木繪里さんにはご出演を見合させていただきましたことになりました。

世の賛嘆を集めてきた、あの名曲を生演奏で聴く喜び。はたまた、未知の素晴らしい響きに包まれて時を忘れる幸せ…。次回の定期演奏会では、そんな両方の愉しさを味わっていただけます。

今季のセントラル愛知交響楽団は、さまざまな土地を旅するように、オーケストラ音楽の名曲・秘曲たちを取り上げてきました。さらに、この楽団の持ち味を生かすために、あまり大きすぎない編成の作品をプログラムに並べて、その緻密なアンサンブルを磨き込んできました。本日お聴きいただくチャイコフスキートモーツアルトも、ひきました樂器編成から豊かなサウンドが広がる驚きを体感していただける作品です。

次回、我らが常任指揮者・角田鋼亮が指揮台に立つ第181回（3月6日）定期でお聴きいただくのは、生演奏で触れる機会がほとんどない（けれど、聴けばその天才的な輝きに魅せられることうけあい）傑作・シュレーカー

「室内交響曲」と、交響曲というジャンルの堂々たる金字塔にして、幾たび聴いても感嘆に身震いするようなモーツアルト《ジュピター》交響曲。どちらも、オーケストラにとっては実力を厳しく問われる作品でもあり、それぞれ違うかたちの（演奏する歓び）を満喫させる作品ですから、きっと演奏家たちの感じる幸せの波動が客席にも強く伝わることでしょう！

どちらの作品も、楽都ウィーンに生きた作曲家——この街に愛され、しかし不遇のうちに生涯を閉じたふたりの天才が、（交響曲）というかたちに爆発的な才気を満たした傑作です。セントラル愛知交響楽団とたどってきた音楽の旅…お客様と共に（音楽の生まれる場）、コンサートホールでの生演奏を守ってきたこの旅も、次回のウィーン傑作選で今季はひとまず終着駅です。

### ◆悲運の天才・シュレーカーの再発見へ！

フランス・シュレーカー（1878～1934）という作曲家は、日本のコンサートでその作品を聴く機会こそなかなかありませんが、生前はウィーンをはじめヨーロッパの音楽界を席巻した人気オペラ作曲家でした。

当時の楽壇では、前回定期で《町人貴族》組曲をお聴きいただいたリヒャルト・シュトラウス（1864～1949）がドイツを代表する大オペラ作曲家として人気を誇っていました。《サロメ》《ばらの騎士》など彼のオペラは、今でも世界中の歌劇場で上演され続ける（去年今年は厳しいご時世でしたが…）不朽の名作。

ところが、彼を追うように同時代のオペラ界にあらわれ、《遙かなる響き》《烙印を押された人々》《宝を探す人》などヒット作を飛ばし続けたシュレーカーは、1920年代に入ると新作オペラで続けて不評を得るようになり、しかも反ユダヤ主義の高まりなど厳しい政局の煽りも受けて（シュレーカーはユダヤ系の人でした）、作品の上演は妨害され、音楽学校の校長職も追われ、失意のうちに病死するのです。

やがてオーストリアはナチス・ドイツに呑まれ、楽都ウィーンも戦禍に巻き込まれてゆきます。…いちど楽壇から排除されてしまうと、復活は厳しいものでした。ナチスの上演禁止によって実演の絶えたシュレーカー作品に、いまひとつ光があるたるのは戦後も長く経ってから。1980年代から再評価が始まりましたが、それでも一度叩き潰された知名度を取り返すのは難しいものです。

とはいえ、オペラの代表作にもCDレコーディングが登場したほか、彼が活躍の全盛期にウィーンの音楽家たちのために書いた傑作《室内交響曲》（1916年）は、シュレーカーの名を蘇らせるにふさわしい代表作のひとつとして、各地で演奏・録音されるようになりました。

### ◆夢幻のサウンド、ソリスティックな躍動を満喫する《室内交響曲》

次回定期でお聴きいただくこのシュレーカー《室内交響曲》は、19世紀末から20世紀にかけて爛熟の輝きを魅せたウィーンの芸術界で、特異な光をはなつ傑作です。

シュレーカーの音楽には、同時代を生きたリヒャルト・シュトラウスの音楽にある響きや色彩の豊穣はもちろん、初期に影響を受けたドイツ・ロマン派音楽の豊かな詩情、はたまた偉大な先人ワーグナーの旋律作法や、当

時のさまざまな音楽（たとえばフランスのドビュッシー、イタリアのプッチーニ…）が切り拓いた、新しい響きの感性も取り込まれていました。

折衷的でもあり、多彩でもあります。内容的にも大胆な挑戦をみせた（ために復活も難しかった）シュレーカーのオペラ…に接するのはなかなか機会も限られていますが、《室内交響曲》には彼の才気が見事に結晶しています。

夢幻に漂うようなその冒頭から、一瞬つかみどころのなさを感じるかも知れませんけれど、聴き迷うような難しさはありません。むしろ、雰囲気や色あいの変化は分かりやすく、詩的な物語の展開に感性をまかせるように、その魅力を満喫できるはずです。

切れ目なく続く25分前後の全曲、そのなかにも伝統的な交響曲でいう緩徐楽章やスケルツォにあたる部分も明快に聴き取れますし、息長い詩情のうねりのなかに響く、調性も曖昧に描かれる蠱惑的な色彩が、ずっと耳に溶けてくるはず。

なにしろ《室内交響曲》ですから、楽器編成は限られるのです。しかし、そのなかで最大限の効果を發揮するオーケストラ書法は、そのクリスタルな透明感のなかにも、光をうけて夢幻の虹を生むような素晴らしいもの。色をぶ厚く塗ることなく、しかし驚くほど豊かな色合いを生んでみせる…見事なわざです。

管楽器はそれぞれひとりずつ、音色の特徴を際立たせながら巧みに織り合わせてゆくのですが、サウンドを彩るハープやチェレスター、ハルモニウムやピアノといった特殊楽器、金属系の打楽器などがつくりだす繊細な色彩…さらに、弦楽器は細かく分割されて（ヴァイオリンは4部、ヴィオラは2部、3部のチェロにコントラバスと全10部。それぞれの人数も少なめに指定されています）、響きや旋律の絡み合いをより繊細に、より深く描いてみせます。

ひるがえって言うと、オーケストラにとっては、全員にソリスティックな技術と音楽性が求められながら、楽団としての高度に鍛磨されたアンサンブル能力も問われるという…なかなか手強い作品。次々に拍子が変わってゆくスケルツォなど、手に汗にぎるような難しさから軽やかな飛翔をみせるのも聴きどころですし、ときに官能的な、ときに久遠の彼方へまなざしを向けるような夢の氾濫…遠い幻へと還ってゆくようなエンディングまで、なにしろ美しい作品です。

セントラル愛知交響楽団とマエストロ角田、名コンビが今季の定期で追究してきたもののひとつの答えが、ここで形になるはずなのです。必聴！

### ◆神々のなかの神…楽都ウィーンに生まれた壮大な傑作《ジュピター》

そしてシュレーカーに続いてお聴きいただくのは、ヴォルフガング・アマデウス・モーツアルト（1756～91）最後の交響曲である、第41番ハ長調 K.551（1788年）。《ジュピター》の愛称で知られる傑作です。

ジュピターとは、ローマ神話に登場する最高神ユピテル（の英語読み）。平原綾香さんの歌唱でお馴染みになったジュピター（=木星／ホルストの組曲《惑星》より）も、元はといえばこの最高神が語源です。

交響曲に〈神様のなかの神様〉を名付けるとはまだごとではありませんが、モーツアルト自身がつけたタイトルではありません。とはいって、聴くと「なるほど…」と皆が思ってしまうからこそ、この愛称。——なにしろ堂々とインパクトあるその冒頭、莊厳な光を放ちながら生き生きと躍動する音楽から、天才作曲家の凄みを感じさせられるのですが、終楽章のフーガ（幾つの旋律が巧みな追いかけっこを魅せます）の壮大さときたら…。何十回聴いても、その充実した作曲法がオーケストラを途方もない高みへ解きはなつさま、なるほどジュピターです。

今季のセントラル愛知交響楽団は、パリにまつわる音楽を集めた第178回定期（9月）でもモーツアルトの交響曲第31番《パリ》をとりあげましたし、本日の定期でも彼のピアノ協奏曲第27番をお聴きいただいたりと、35歳の若さで世を去った天才の音楽をあれこれお楽しみいただきました。オーケストラにとっては、愛し続けても底の見えない魅力に満ちた（ある種の魔力を秘めた）モーツアルトの音楽を、仲間たちと共に歌い響かせてゆくその時間は、楽団の音楽性を育て鍛える（そして共に愉しむ！）大切なものであったのではないか…と拝察します。

今季、実に洒落て巧みな選曲とともにオーケストラと向き合った、我らが常任指揮者・マエストロ角田とともに、次回の定期は《ジュピター》の壮大を、このコンビだからこそ築き上げてきた〈音楽〉として皆さんと共有します。ぜひその代え難い時間を…コンビがいま達する最高の結実を（来季のプログラムも発表されたところで、コンビのさらなる飛躍へ向けて！）、このホールで、ご一緒に。

やま の たけひろ  
**山野雄大**

ライター[音楽・舞踊評論]。『音楽の友』『レコード芸術』『バンドジャーナル』各誌をはじめ雑誌・新聞への寄稿、テレビ・ラジオ番組での解説、CDライナーノート・企画構成、オーケストラやバレエ公演の演目解説、取材撮影など多数。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》司会・構成。

